

温かい言葉で優しい社会を





私たちは、家族や友人、仕事上の関係など、多くの人々とのかかわりの中で暮らしています。そして、その中で接する人々の言葉から多くの感^{かん}を受け受けていることがあります。また反対に、私たちの発^{はつ}する一言^{ひとこと}が、さまざま^{さまざま}な機^き会^{かい}に出^い会^{かい}う人々に大^{たい}きな影^{えい}響^{きやう}を与えることもあるでしょう。

今月はそのことについて考えてみたいと思います。

言葉をかける 勇気がない

ある日の夕方、会社員の池田さん（40歳）が、出張からの帰途、A駅で電車に乗ったところ、数人が立っている車内で一つだけ空いている座席が目に入りました。だれも座^{すわ}る気配^{けい}はありません。少し疲^{つか}れていた池田さんは、座るために小走りでその座席に向かいました。池田さんが座ろうとすると、同じように六十歳ぐらの会社員らしき男性も座ろうと近づ





いてきました。

空いた座席に少し早く着いた池田さんが座ることができました。その男性は池田さんの前で黙だまって立たっていました。かなり疲れている様子です。

池田さんは、「この人も毎日、仕事で大変なのだろう」と同情しましたが、「席を替かわりますようか」という言葉をかける勇氣はありません。相手のことを考えると、「自分が立たって男性に座席に座まってもらったほうがよかったかな」と思いました。

やがてその男性が電車から降り、池田さんは、なぜかほっとしたような解放された気持ちになりました。距離きより的には一メートルほどしか離れていないのに、相手に近づく難しさを感じました。

言葉を交わす 喜び

いくつか駅を過ぎて目的の駅に着いた池田さんは、電車を降り、駅前で停車中のバスに乗り込みました。始発なので乗客はいません。池田さんは降り口に近い席に座りました。今度は気がねなく座ることができません。席に座りながら、先ほどの電車内のことを思い出し、「お年寄りでもない、見ず知らずの人に声をかけて席を譲るなんて普通はしないよなあ」と思いつつ、結果として相手を無視したこ

とに少しばかり後味の悪さを感じていました。

バスの出発までしばらく時間があり、しだいに乗客が増えて混んできました。しばらくして、赤ちゃんをベビースリング（抱っこひも）で抱いた若いお母さんが池田さんの席の前に立ちました。赤ちゃんは機嫌が悪いのか、ぐずって泣いています。

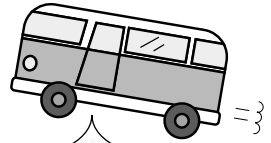
池田さんは少し迷いましたが、先ほどのことがあり、「どうぞ。座ってください」と言つて、席を立ちました。

そのお母さんは、「すぐに降りますから結構です。ご親切にありがとうございます」と笑顔で答えました。そして、池田

さんの前で立ったまま、「いい子だから、もう少し我慢してちょうだい」と優しく赤ちゃんに話しかけながら、あやしました。やがて赤ちゃんは機嫌が直つたらしく、ニコニコしていました。

池田さんは、その母子のほほえましい姿を見ながら、心が温かくなるのを感じ、相手に温かい言葉をかけてよかったですと思いました。そして、バスでのさまざまな出来事から人と言葉を交わす喜びを実感しました。

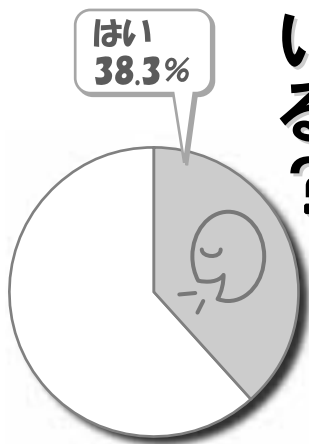
言葉を交わすということは、単に用件や情報を伝えることばかりではなく、心の交流、心のふれあいにもなると感じました。



話す機会が減っている??

文化庁が行った「国語に関する世論調査」(平成二十年年度)によると、人と付き合うときに、「互いの考えていることをできるだけ言葉に表して伝え合うか」という設問に対して、三八・三パーセントの人が「はい」と答えましたが、平成十一年度の同じ調査と比較すると、十二ポイントも減少しています。メールや携帯電話など、コミュニケーションの方法はたいへん便利になりましたが、互いに言葉をお交わす機会は減っているようです。

見知らぬ人間どうしがさまざまな場面でお接する機会が多い社会です。知らない



人に対して言葉をかけることは勇気がいることです。相手に温かい言葉をかけても、常につながらりや親しみが生まれるとは限りません。むしろ、嫌な顔をされる場合や無視されることのほうが多いかもしれません。

しかし、期待するような応答はないだろう。嫌な気分になることは避けた



いゝなどと思ひ、無言のままにいるほうがよいとは言えないでしょう。

私たちは日常生活の中で、たった一言の言葉が自分と相手の距離を近づけ、緊張感や不満を解消したという経験を持っています。また反対に、暗い夜道や人通りの少ないところで、相手と無言ですれ違っただけで、不安な気持ちになることがあります。

昨今では、駅の構内こうないや町の通りで相手とすれ違うとき、強くぶつかつても、「失礼しました」「すみません」の一言も言わないで、無言で過ぎ去っていく人もいます。

そのような人たちがばかりになれば、私たちの社会は寒々さむさむとしたものになってしまうでしょう。

他人の言葉に励まされて

「袖振り合うも多生の縁」という古くからのことわざがあります。このことわざは、小さな出来事でも、それはすべて前世からの縁で起こっているという意味ですが、「袖振る」とは、本来、「挨拶をする」という意味だったようです。言い換えれば、挨拶を交わす人は自分にとって大切な人とも言えるでしょう。

現在、五十歳になる竹村さんは三十五年前、見知らぬ人に言われたある言葉が今も鮮明に心の中に残っています。

竹村さんは高校時代、郷里を離れて県外で寮生活を送っていました。寮内では先輩と後輩の区別が厳格で、下級

生は上級生に対して敬語を使わなければ、上級生から強く叱責を受けました。竹村さんは懸命に敬語を覚えながら寮生活を送りました。

長く感じられた一学期が終わり、竹村さんは、初めての夏休みで帰省することになりました。

帰路の途中、竹村さんはN駅から高速バスを使って自宅に向かいました。座席はほぼ埋まっていたましたが、時間がたつにつれて、乗客はまばらになってきました。

しばらくすると、竹村さんの座席の隣



に座っていた中年の男性が竹村さんに話しかけてきました。

「君はどこまで行くのかね」

突然の問いかけに少し驚きましたが、「はい。夏休みで帰省するためにH市までまいります」と答えました。

竹村さんは見知らぬ男性に対して丁寧な言葉づかいで答えました。

上級生と同じ部屋で生活を続けていると、寮から出ても緊張感が抜けきらず、親や親友にも敬語を使ってしまうということがあったのです。

男性は「ああ、私もH市で降りる」と言いながら、竹村さんに学校のことなどいろいろと話しかけてきました。そのと



きの会話からその男性は、竹村さんの故郷の近くのゴルフ場で集まりがあり、そこに向かっているとのことでした。

「このあたりの明日の天気はどうだろうね」と男性から尋ねられたので、竹村さんは、「おそらく、晴れると思いますが、風が強いと思います」と答えました。

しばらくして目的のH市に近づき、竹村さんが降りる準備を始めると、その男性は、「君は丁寧な物言いをする青年だ。

よい教育を受けてきたようだ。今日は君のようならばらしい青年と話ができて楽しかったよ」と、うれしそうに話しました。



目的地でバスを降り、その場で二人は別れたのですが、竹村さんは心の中がわくわくした感覚を今でも覚えています。

竹村さんは、この男性の言葉から自分の経験している高校の寮生活が間違っていないという自信を得るとともに、励まされたように感じました。そして、これまでの寮生活でのつらい日々が報われたように思いました。

※

私たちも竹村さんのように、さまざまなお機に偶然に出会った人の言葉から励ましや気づきを得た経験があるのではないでしょうか。

相手を肯定し、温かい言葉をかけることの効果は大きく、見ず知らずの他人にも喜びを与えることができます。

人生の糧となった恩師の言葉

さらに、見ず知らずの人からだけでなく、私たちは身近にいる人の言葉からも多くの励ましや教えを受けています。

大学で心理学を教えながら日本に論理療法を導入し、その第一人者である国分康孝氏は、恩師の霜田静志氏（精神分析学者・元井荻児童研究所長、一八九〇〜一九七三）からの言葉を人生の糧としました。

——まだ私が大学のころであった。新宿でビールをご馳走になりながら私は、「先生のように人の相談を受ける方はご自分の問題はどなたに相談するのですか」とこう尋ねた。温和な先生としては珍しく語気を強くして「国分君、人の相

談を受ける人間が自分のことくらい自分で始末できないでどうする」と話された。この言葉は後年私が教師になり、カ



ウンセラ―になつても絶えず私を励ますことになつた。

私は二十三歳から四十三歳まで二十年間、先生との接触があつたが、その間職に恵まれない時期が二回あつた。先生は親分肌ではないので特に職を弟子のために探すということはしなかつた。しかしそれが私に幸いした。それは次のようなアドバイスに比較的忠実に私が生きてからである。「国分君、人が地位を求めめるのはだめだ。地位のほうから人を求めるにやるようにならなければ」。したがつて、私は不遇のときに一番よく勉強した。先生が危篤という情報が入つた。私は二十年間の思いを込めて個条書の速達を出した。「①先生のおかげで今日の私になれたことを感謝しています。②先生が私

にしてくださったように私も学生にして返したい、これが私の恩返しです」と。

先生の意識が一時回復したとき奥様がこの手紙を読んでくださったそうである。先生は私にこう伝えてほしいと言われたという。「私のおかげではない。私をえらんで今までついて来たのは国分君自身だし、私のような人間から学ぶべきものを発見したのも国分君自身だ。だから感謝せず、そういう人生を自ら決断してえらんだ国分君自身に感謝するように」と——（モラロジー研究所『れいろう』昭和五十一年七月号参照）

国分氏を勇気づけ、大きな力を与えた霜田氏の言葉のように、私たちも慈愛と励ましに満ちた言葉を使つていきたいものです。



一人ひとりの温かい言葉を集めて

鎌倉時代の僧で日本における曹洞宗の開祖・道元禪師は、『正法眼蔵』の中で、次のような言葉を残しています。



「愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。おほよそ暴悪の言語なきなり。(中略) 愛語は愛心よりおこる、愛心は慈心を種子とせり。愛語よく廻天のちからあることを学すべきなり、ただ能を賞するのみならず」

(愛語というのは、衆生に対してまず慈愛の心をおこし、思いをかけて愛のことはを語ることである。およそ荒々しいことばは口にしないのである。(中略) 愛語は、愛する心からおこるのであり、愛す

る心は、慈しみの心を種としているのである。愛語は、まことに天下の時勢を変えるだけの力のあることを学ぶべきである。ただ相手の能力を賞める^ほだけでは、愛語ではないのである）（玉城康四郎著『現代語訳 正法眼蔵』大蔵出版）

私たちは、さまざまな場で多くの人々に接しています。そのような機会であ会う人々に、温かい言葉をかけることで、人は勇気を得たり、自分の可能性を発見したり、喜びを見つけたりするのです。また、それは巡り巡^{めぐ}って自分自身の喜びにもつながるでしょう。

私たち一人ひとりが相手に温かい言葉をかけることで社会は良い方向に向かうのではないのでしょうか。その力はわずかかもしれない。しかし、多くの人の温

かい心が集まれば、大きな力になるのです。

そのためにも、相手に優しい心のもった温かい言葉を使いたいものです。一人ひとりの温かい言葉が社会を大きく変えると信じて、優しい心を届けていきましょう。

